

指導資料  鹿児島県総合教育センター 平成30年10月発行	国語 第144号	
対象 校種	小学校 義務教育学校 特別支援学校	

「深い学び」の視点を意識した国語科の授業改善 —言葉による見方・考え方を働かせた言語活動の充実—

各教科等の学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え方」と言われている。そこで本稿では、より質の高い深い学びにつなげるための国語科の授業改善のポイントについて、具体的な単元の指導事例を基に述べることにする。

1 国語科における「深い学び」

中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』（2016年12月21日）で出された「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニングの視点）」では、「深い学び」について、次のように説明されている。

習得・活用・探究という学びの過程のなかで、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学び。

（※ 下線は筆者による。）

この説明で注目したいことは、「知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学び」の部分である。児童が課題解決を通して身に付けた知識や技能を構造化して概念的な理解に高めていくことを指しているのである。例えば、説明的な文章の解釈についての学習であれば、単にテキストの内容を正確に理解することに留まらず、

事柄の順序に沿って説明するということがどのようなことか、事例を効果的に示しながら説明するとはどういうことなのかを児童自らが説明・評価できるようになることである。そのためには、児童が図鑑などを読み、理解したことを説明する活動や、内容を説明したり考えたことを話し合ったりする具体的な言語活動を行う必要がある。単元の学習過程においても、言語活動を通して、調べた情報を整理したり、分かりやすく説明したりするためにはどうしたらいいのかを実感をもって理解できるような場を実現する必要がある。

このような学習を展開するためには、児童自らが言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動を意図的に設定し、学習活動の質を高めていくことが求められる。

その際、児童自らが自分の思考の過程をたどり、自分が理解したり表現したりした言葉を論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面からどのように捉えたのかを問い直して、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深め、新たな語彙を獲得できるような価値ある言語活動の設定が、「深い学び」のポイントとなる。

2 言語活動設定の留意点

小学校においては、言語活動を位置付けた課題解決的な単元構成による授業実践は一般的に見られるようになってきた。国語科は、具体的な言語活動を通して指導事項を指導する教科である。しかし、言語活動は行われているものの、身に付けたい力（指導事項）が不明確な授業実践も散見される。このような実践（言語活動）の具体を以下に示す。

第3学年 「C読むこと」
単元名「場面のうつりかわりをとらえて、感想をまとめよう」
教材名「ちいちゃんのかげおくり」
(光村図書 三下)

指導事項
エ 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像すること。
(文学的文章の精査・解釈に関する事項)

言語活動
イ 詩や物語などを読み、内容を説明したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動
(※ 本単元では物語を読んで、感想を伝え合う活動を設定。)

《単元の流れ》(全10時間)
第1次(第1時～第2時)
○ 学習課題を設定し、学習の見通しをもつ。
第2次(第3時～第6時)
○ 「ちいちゃんのかげおくり」を場面ごとに読み、出来事や登場人物の気持ちを考えながら読む。
・ 第1場面と第4場面の「かげおくり」を比較し、相違点をノートにまとめる。
・ 二つの「かげおくり」の間の出来事やその間の「ちいちゃん」の状況や気持ちについて考える。
第3次(第7時～第10時)
○ 一番心をうたれた場面を中心に、理由とともに感想文を書き、交流する。
・ 感想文を書く。
・ 交流する。
・ 学習を振り返る。

上記の学習の流れは、光村図書のWebサイトの年間指導計画例にも示されているものであり、一般的な授業展開例と考えられる。各学校もこの指導計画例を参考にしながら自校の年間指導計画を作成している場合が多い。

また、教科書には感想文のモデルとなる型(図1)も示されており、この型に沿って感想文を書かせるといった実践が多く見られる。

2 次のような組み立てで、感想文を書きましょう。		
はじめ	中	終わり
物語を読んで感じたことなどを書く。 ・ さいしょの感想 ・ 心にのこった言葉 など	いちばん心をうたれた場面を中心に、感じたこととその理由を書く。 自分の考えを書く。 ・ 作品を読んで、ねがうこと ・ これから自分がしたいこと など	「はじめ」や「終わり」が、「中」とつながるようにしましょう。

図1 教科書に示された感想文の型

教師は、この型を基に「はじめ」、「中」、「終わり」の感想文の構成について指導し、「ちいちゃんのかげおくり」の感想を書かせる。構成を意識して書かせるために、この型をベースにしたワークシートを活用して感想文を書かせる実践も多く見られる。

資料1 児童の感想文の例

①わたしは、「ちいちゃんのかげおくり」を読んで、さいしょは、ちいちゃんはかわいそうだと思いました。

②そう思ったのは「夏のはじめのあ

る朝、こうして、小さな女の子の命が、空にきえました。」という言葉が心にのこったからです。

③いちばん心をうたれた場面は一の場面です。その理由は、家ぞくで楽しくかげおくりをして楽しそうだからです。

④この作品を読んでねがうことは、これからも平和がいいです。

⑤これからは、平和がつづくようにがんばります。

この感想文は、提示された構成の型に沿って書かれている。構成を踏まえた感想文としては成立している。しかし、本単元に設定する言語活動としては不十分と言える。それは、本単元で指導すべき指導事項が意識されていない点である。本単元での指導事項は、場面の移り変わりにより、何がどう変わったか、変わったことによりどのような登場人物の心情が想像できるのか、そのことについて自分はどのような感想をもったのかが重要な指導のポイントになる。指導計画の第2次の読みが、第3次の感想文に反映・適用されなければならないのである。そのためには、どのような教師の関わりが重要であるかについて以下に述べたい。

3 言葉による見方・考え方を働かせる言語活動の設定

資料1で示した感想文になった要因を考えると、本単元における作品の読みで働かせるべき「言葉による見方・考え方」が欠落してしまったことが考えられる。本単元では感想をもつ際の着眼点や思考操作について、児童自らに明確に意識させることが重要である。それが本単元における「言葉による見方・考え方」である。本単元における「言葉による見方・考え方」を図2に示す。

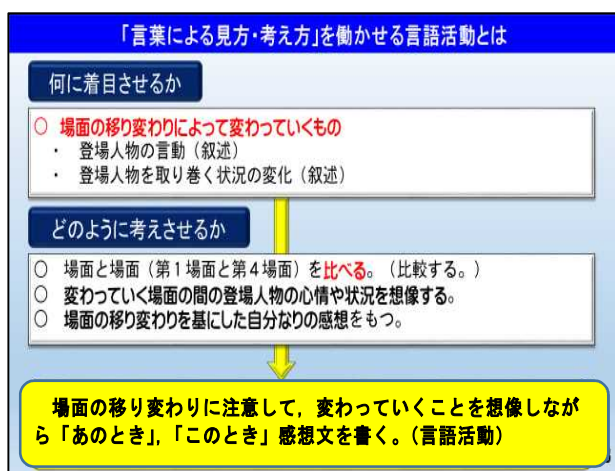


図2 本単元で働かせるべき言葉による見方・考え方

このことを児童に意識させるためには、言語活動を設定する際の学習課題の提示が重要なポイントとなる。本単元の学習で、どのようなことに着眼し、どのように考えていけばよいか明確になるような学習課題の設定が望ましいと考える。本単元では、『「ちいちゃんのかげおくり」を読んだ感想を話し合おう。』という課題設定よりも「場面のうつりかわりによってかわっていくことについて、自分の感想を、場面と場面を比べながら感想文にまとめよう。」のように設定したい。

つまり、「かわっていくこと」が着眼点であり、「場面と場面を比べて」が思考の枠組みである。この言葉による見方・考え方を明確にすることが学習の見通しを明確にしていくことにつながり、ねらいとする言語活動の実現を可能にしていくのである。

第2次（第3時～第6時）

- 「ちいちゃんのかげおくり」を場面ごとに読み、出来事や登場人物の気持ちを考えながら読む。
 - ・ 第1場面と第4場面の「かげおくり」を比較し、相違点をノートにまとめる。
 - ・ 二つの「かげおくり」の間の出来事やその間の「ちいちゃん」の状況や気持ちについて考える。

感想文を書く際の指導のポイントが第2次での学習である。第1場面と第4場面の「かげおくり」を比較しながら読み、登場人物である「ちいちゃん」の行動や「ちいちゃん」を取り巻く状況がどのように変わっていったかを叙述に基づき正確に読ませていくことが重要である。例えば、読み取った事実をノートにまとめさせたり、変化が捉えやすい表にまとめさせたりする活動も効果的である。

この第2次の学習を基に感想文を書かせる際に、先述した感想文の型を活用するとともに、「中」の部分に第2次の読みが反映・適用されるように留意したい。

資料2 児童の感想文の例

①わたしは、「ちいちゃんのかげおくり」を読んで、さいしよは、ちいちゃんはかわいそうだと思いました。

②そう思ったのは、「小さな女の子の命が、空にきえました。」という言葉が心にのこったからです。

③一番心をうたれた場面は一の場面です。その理由は、あのときは家ぞくみんな楽しくかげおくりをしているからです。しかし、家ぞくでかげおくりをしている場面は四の場面にもあります。あのときのかげおくりとこのときのかげおくりまでいろいろなことがかわっています。家ぞくの人数がへってしまいました。すんでいたところがやけてなくなっています。ちいちゃんは一人ぼっちになってしまします。だけど、四の場面のこのときは、家ぞくがもう一どもとどおりになります。でもちがうところもありました。あのときは、本当だけど、このときは天国です。わたしは、やっぱり本当のせいかいいので、一の場面がすきです。

④この作品を読んでねがうことは、天国でしあわせになるのではなく、本当のせいかいであわせたがつくことです。

⑤これから今の平和がつづくように、ちいちゃんみたいな女の子がいたことをわすれません。

資料1と資料2の感想文の違いは、「中」の部分にある。資料2の感想文は、作品名にあ

る「かげおくり」が登場する第1場面と第4場面との比較を基に書かれている。「あのとき」「このとき」という言葉で二つの場面が書き分けられており、場面の移り変わりにより変わっていった「ちいちゃん」の状況から自分なりの感想がまとめられている。

4 言語活動の評価

国語科は言語活動を通して指導事項を指導する教科である。このことから、言語活動を通して身に付けたい力が適切に評価できているかが重要になってくる。教師が児童の思考、判断の状況を適切に評価・指導できてこそ、児童が言語活動の実現を通して自分の学びを自覚したり価値付けしたりすることができるようになる。そして、そのことが「深い学び」の実現につながるのである。

そのためには、評価が曖昧なもの、教師の直感によるものになってはいけない。明確な評価の基準を予め教師は、設定しておくことが必要である。「指導資料 国語 第140号（平成29年10月発行）」でも述べてきたが、「判断基準」の設定を提案したい。本単元の「判断基準」を表1に示す。

表1 「判断基準」設定の具体例

評価規準（「読む能力」）	
○ 読む能力	場面の移り変わりに注意しながら読み、人物の行動、情景、会話などの表現に着目しながら、場面の移り変わりを捉え、作品の感想をまとめている。 （読むこと エ）
思考、判断に基づく表現内容（評価の対象）	
○ 感想文	
判断の要素	
ア 場面の移り変わりによる変化	（登場人物、登場人物を取り巻く状況）
イ 場面の変化を基にした自分の感想	（心を打たれた場面とその理由）
判断基準B（おおむね満足できる状況）	
ア 場面の移り変わりによる変化を作品の叙述を基に書いている。	登場人物の行動や状況の変化
イ 一番心を打たれた場面とその理由が場面の移り変わりを基に書かれている。	作品の言葉の引用
	場面の移り変わりを捉えた自分なりの理由

③ 一番心をうたれた場面は一の場面です。その理由は、あのときは家ぞくみんなで楽しくかげおくりをしているからです。しかし、家ぞくでかげおくりをしている場面は四の場面にもあります。あのときのかげおくりとこのときのかげおくりまでにいろいろなかかわっています。家ぞくの人数がへつていきます。すんでいたところがやけてなくなってしまう。ちいちゃんは一人ぼっちになってしまいます。だけど、四の場面のこのときは、家ぞくがもう一どもとどおりになります。でもちがうところもあります。あのときは、本当かどうか、このときは天国です。わたしは、やっぱり本当のせかいがいいので、一の場面がすきです。

第一場面と第四場面の比較から登場人物を取り巻く状況の変化を捉えて記述している。（基準ア）

第一場面と第四場面の比較を基にした感想（自分の思い）を記述している。（基準イ）

波線部分と直線部分の表記から判断基準ア、イのどちらも基準に到達している状況がうかがえる。言語活動の評価において大事なことは、この「判断基準」を児童と共有して学習の自覚化を図ることである。学習の自覚とは、場面の移り変わりに注意して作品を読むということはどういうことなのかを児童自身が自分の言葉で説明・評価できるようにすることである。「判断基準」を活用することで、児童は感想文を書いた学習過程を振り返ることが可能になり、作品の読みでどんな点に着目し、どのような思考をしたか、その際に気を付けたことはどんなことであったかを理解することができるようになるのである。

国語科における「深い学び」の実現の鍵は、言葉による見方・考え方を働かせた言語活動の充実にある。このことを意識した授業実践が、今後一層推進されることを期待したい。

—引用・参考文献—
○ 達富洋二 「H29年度山下小学校研究公開における講演資料」 平成29年11月
○ 鹿児島県総合教育センター『指導資料(国語第140号)』平成29年10月
(教科教育研修課 宮脇 一郎)